松山幸生先生講述

全32回ー30

ヘブライ人への手紙に学ぶ

2024年01月

1996年1月から1998年10月

写者　小原靖夫

第30回
永遠の契約の血による羊の大牧者
第13章⑳節から㉑節
結びの言葉

⑳永遠の契約の血による羊の大牧者、わたしたちの主イエスを、
　死者の中から引き上げられた平和の神が、
㉑御心に適うことをイエス・キリストによってわたしたちにしてくださり、
　御心を行うために、すべての良いものをあなたがたに備えてくださるように。
　栄光が世々限りなくキリストにありますように、アーメン。

今日はヘブライ人への手紙13章の最後の部分をご一緒に学ぶわけですが、奇しくも今日は、53回目の敗戦記念日となったのです。その中で神の御言が変わることなく、しかも神はいつでも真理をもって呼びかけていらっしゃることに、もう一度心を向けたいと思います。
今日は第⑳節からですが、⑳節、㉑節は、当時の教会から今日に至るまで諸教会が祝福の祈り、祝祷として用いられている箇所です。

第⑳節、㉑節前半、
永遠の契約の血による羊の大牧者、わたしたちの主イエスを、死者の中から引き上げられた平和の神が、御心に適うことをイエス・キリストによってわたしたちにしてくださり、御心を行うために、すべての良いものをあなたがたに備えてくださるように。

かなり長いフレーズです。ギリシャ語原典でこれを読みますと、冒頭に出て来るのは「平和の神」という言葉です。平和の神とはどういう御方かという説明が色々と細かく書かれています。日本語だと、どうしてもその一番大事な部分が説明の終わりに来てしまいますけれど、原典では、文章の頭に「平和の神」という言葉がズンと出て来るわけです。

丁度今日は敗戦記念日ですから、テレビなどのメディアで8月月６日あたりから今日１５日まで色々な特集が組まれ、「平和」ということが考えられています。昨夜6チャンネルのテレビでは、スタッフたちが中心になり、敗戦の日に因んで敗戦経験世代の方々をスタ

ジオに招いての対談がありました。０時ジャストに「今8月15日ですから・・」ということで話し合いが始められていったわけです。

そこでは、平和という問題或いは敗戦という問題が、どう捉えられていたのかと言うと、おもに３つの観点から、１）非常に特異な現象的事柄として捉えられている、２）歴史上の一場面という形で捉えられている、或いは、３）過ぎ去ったある一つの事実という格好で捉えられている、ということが挙げられていました。
ということは、「今、私が生きていることと直接には繋がらない、何か思い起こしたり考えたりする時には多少影響するだろうけれども、普段の生活では全く問題にならない」そういう形で、この『敗戦という問題』が今の我国では捉えられているのだと知りました。

すでに昭和30年頃には、「もう戦後は終わった。」と言う大臣が出て来て、「日本が戦争で負けたなどということは忘れてしまいましょう、新生日本として歩み出しましょう。いや、それよりも、もう一度昔の日本に立ち返りましょうか。」などと言い出され、そういう（言わば風見鶏的）運動が段々活発になって来まして、今日に至っています。

聖書の中で、平和は一体どのように考えられているのかをみますと、例えば「私たちの生活圏における平和」などということはあまり言わない。或いは「国際間の平和」も殆ど問題にしていないのです。
「なぜ聖書は、そのような『平和』を問題にしないのだろうか？」

私共の教会では毎年8月になると、「平和」を考えましょうと、礼拝や様々な教会行事の中でその問題を考えていきますが、そこで平和について考えて行けば行くほど、確かに聖書の中には「皆で仲良くしましょう」というような平和論はありませんし、「国と国がいがみ合うのは止めましょう」という平和論もないことを知るのです。

先ず、この手紙では「平和」が何に対して求められているのだろうか？
「あなたがたの交わりが神の支配のうちに行われ、平安が常に保たれますように、教会が平和でありますように」という祈りが出て来ます。これに対して「教会だけが平和であればいいのか？」、一般の人々は、よくそんな声を上げられます。「あなたがたは、教会さえ平和であれば、それでいいんですか、教会が自分たちの平和を守ろうとして、世の中を乱して来たことはないんですか？」そんなきつい質問を頂くこともあります。

しかしながら『教会に求められている平和』とは、彼らが抱いているイメージとは幾分違います。それは、自分にとって自然で心地よい平和ばかりではありません。ですが、そういうお互いが違和感を抱いている中に、自身の信仰が揺さぶられている神の現実を感じながら、「＜にもかかわらず＞、キリストがこの私を赦してくださったのだから、自分も相手を出来る限り寛大に受け入れ、お互いの良き関係性を主の御前に形成してゆきましょう」というのが、『聖書でいう平和』なのです。

ですから、「平和の神」とは、平和を与える神ではなく、平和をもたらす神でもない。

「平和を生き抜かれた神」なのです。その神の平和を生き抜くことは何を意味しているかというと、「御子の十字架刑によってしか、樹立され得なかった平和を、担い続けてゆくこと」です。「そういう教会であってほしい、いやそこにこそ本当の平和がある」という考え方が、聖書の中ではしっかりと根を張っているのです。

世の人々が求める平和は、多かれ少なかれ、誰からも自分が排除されない、傷め付けられない、そういう関係だと考えますが、そうじゃないんですね。イエスがなさった事柄との結び付きで言うならば、イエスに招かれた者を誰をも排除しない、傷め付けない、疎外しない、という生き方をすることが「教会の平和を生きること」なのです。ですから「平和の神」は、すごい神力をもって皆をぎゅっと言わせ、屈伏させ、服従させていく、というような強引なイメージとは随分違うのです。

この手紙を読んで来ると、その中で「神共に在られるイエス・キリストが、大祭司である」と語った時に、「彼は勝利者であるから『大祭司』なのだ」とは言っていない。「あなたがたの弱さを身に負って、排除せず、傷つけず、無視せず、お捨てにならなかったから『大牧者』なのだ」という捉え方をしているのです。
そして、捨てられて当然の者が捨てられない、無視されて当然の者が無視されない、何の役にも立たないと思われてきた者が、大切に、ある物事の中心に据えられている。「福音」というのは本来そういう形のものだったことを、知るに至ります。

イエスが、お弟子さんたちと一緒に旅を続けておられた時に、子どもたちが近づいて来た。伝道の旅でお疲れになっているのを気づかった弟子が、「先生は疲れているから来ちゃあいけないよ」と注意した。それをお聞きになったイエスは強く首を振られ、更なる彼らの言葉をも遮られて、「いや、むしろ、神の国とはこういう子どもの国なんだよ」と仰り、子どもたちを抱き上げて祝福された、というお話は良く知られています。

役に立つから、有益だから、将来性があるから、イエスは子どもたちを祝福なさったのではないのですね。別な言い方をすれば、子どもは、助けられなければ立つすべを知らないからこそ、助けてやらねばならない。何のお礼も見返りもできないからこそ、その子に愛情を注がねばならない。そういう深い御配慮がイエスの御生涯を貫いておられることが、聖書の中に記されています。

この手紙は、正にそのイエスの御名をお呼びし、主に従ってゆきましょうというスタンスで勧めて来たわけですから、今日のこの箇所でも「平和の神」という言葉が、その繋がりの中で使われているのです。圧倒的な神力を持った神のイメージではなくして、どんな些細な願いを持って生きている人にもその願いを無視しない、切り捨てない、神の愛の配慮の中に位置付けられている、それが、主イエスの平和なのです。

私たちの国は戦後53年の歴史の中で、ほんの僅かの瞬きする位の間だけ、そのイエスの御心に近い思想をもった政治が行われたことがある。弱い者が切り捨てられない、無視され

ないということが、政治の中心に座をしめているように導かれ、整えられなければならないという形で政治が行われた。(村山政権、1994年6月30日から1995年8月8日　写者記)
その他の殆どの時代は、そういう形での政治は行われてこなかった。

更に「強い力い者の陰にいれば、自分たちは強いのだ」そういう理念に立って1960年に『安全保障条約』が結ばれた。それが10年毎に改定されることになって1970年には、改定を押し進めようとする政府の力と、そのことは本当の平和を作り出さないと反対する人々との間に激しい闘いがあった。そして後者に犠牲者が出た・・その闘いが一つの頂点に立ったのでしょうね、反対する勢力がそこから破れていってしまった。
（それ以降労働組合運動は弱体の一途を辿って今日に至っている。写者記）

ということから、「日本の平和への歩みが、いつしか『力をもって周りを押さえつける平和』へと歩みを変えてしまった」　今は、大変残念ながら私たちの国では、近隣諸国よりも自国の利益を優先しますから、いざという時にはどこの国とでも戦えるという法律を作ろうとして、それを完全に施行できるように法整備が進められているのです。
(これは2023年にほぼ完成された形をとった。敵基地攻撃能力を保有することが認められた。写者記)

新約のイエスは、そのような姿を見てどう思われるだろうかと考えますと、それは順序が違うんですね。すべてを包み込んで、たとえ自分が滅びても、命を失っても、弱い者を担い続けていこうと、新約時代になってイエスがそうなさったから、それが聖書の思想になったのではなく、聖書は、既に旧約時代から同じようなことを言い続けてきたんです。

イザヤ書にもエレミヤ書にも神の約束として「あなたがお母さんのお腹の中に形づくられる時から、わたしはあなたを知っている。だから、わたしはあなたに対して常に愛を注ぎ、恵みを注ぎ、あなたがこの世に産まれ出た時から今日に至るまで、あなたは満足できないかもしれない、納得できないかもしれないけれども、あなたを担い続け、背負い続け、運び続けて来たのだ。同じように、あなたがよぼよぼして歩けなくなって、白髪になったその時にも、あなたを同じように愛して､同じようにあなたを担い、背負い、持ち運んでいく」という意味のことが書かれてあり、そして、「あなたを離れることはない。いつでも一緒にいる（13章⑤節）」とこの手紙でも書いているのです。

「私たちを造り、すべてを知り尽くしていらっしゃる御方」が私を支えてくださっている、そのことに心が向いた時、本当の平安を受けるのです。シャロームを得るのです。
「誰かと同じだから、誰かと同じように自分もできるから」ということが保証されていることであるならば、そういうメリットが無くなった時に、生きている意味まで失います。
いつも共にいてくださる神、その御方イエスは、所謂「この世的な選好み」をなさらない。御自分が安楽な座を占め､平安の中に生きられつつ、大勢の人に最上天から御恵みを垂れる神ではあられない。そうではなく、前回の箇所に出て来ましたが、<u>最下地から御恵みを垂れるために「門の外に出る」ことを実践してくださった神</u>であられるのです。

イエスは、御自分の御身を保障される天の地位から飛び降りられて、誰からも相手にされない状況に身を置かれた上で、人間たちを救われたように、そのような人間が、神から創られたことを喜べるように歩まれたのです。イエスの公生涯は正にそういう生涯でした。

「らい病」(当時の聖書では「重い皮膚病」、最新の聖書では「既定の病」) と認定されれば、多くの人々から疎外され、「私はあなたに病気をうつす悪い奴です。悪の根源です」というような言葉を叫び続けながら、道を歩かなければならなかった。そうした人々に、イエスだけは近づいていかれた。そうして手ずから癒され、励まされたのです。

私たちは、疎外されて自分の立場が危険に晒されている人々と共に立つことが、大変苦手です。私たち自身の生き方として「受難者の立場に共に立つ」という選択肢を、残念ながら我国の学校教育では教えられて来なかった。幸せにしてあげるとは、自分の今いる安全な場所へ、危険な所に立っている人を「引き寄せてあげること」、彼らを「自分と同じ場所に立たせてあげること」、それがその人を幸せにすることなのだと教えられて来た。
ところが、「皆が同じ場所に立ったら、皆が幸せです」などとは、新約聖書の中のどこにも書いていないのです。

あの大伝道をしたパウロも「ユダヤ人はユダヤ人、ギリシャ人はギリシャ人、皆違うんだから同じにならなくてもいいじゃないか。福音伝道者は、ユダヤ人にはユダヤ人のように、ギリシャ人にはギリシャ人のようになり、弱い者には弱い者のようになり、律法なき者には律法なき者のように、律法ある者には律法ある者のようになり、そのようになる中で、一人一人に神が臨んでくださって、その場で恵みを与え、その場で救ってくださるのを見るのだから、私もそのようにして宣べ伝えているのだ」と言っているのです。
「平和の神」という言葉ですが、神様号という船に乗ったならば、それこそ「何もしなくても平和ですよ」と言っているのではないですね。今日のこの箇所を少し丁寧に読んで見ますと「あなたがたの平和は、この永遠の契約の血によって、しかも唯一回限りの完全な契約の血によって、保証されている平和です。」とあります。つまり「イエス・キリストの十字架なしには成り立たない平和を、あなたがたは今担っているのです」と、この箇所は言っているのです。

それは、「大牧者；ポイメナトーン（羊飼い）プロバトーン（羊たちの）トン メガン（偉大な）」として、ということですが、ギリシャ語では複雑ですが、日本語になるとすごく分かり易いですね。
キリストは永遠の大祭司だった、メルキゼデクにまさる大祭司だったと言っている、その大祭司（アルキエレウス）という原語に既に含まれている「大」の字と、大牧者の「大；メガス」という原語とは、日本語では同じ「大」ですから良く分かりますが、原典ではそのようにはすっきり分けられていないのです。分けられないけれども、とにかく偉大な、優れた、超越した羊飼いなのです。

この羊飼いという言葉、牧者という言葉をこの著者が使う時、彼の頭の中には幾人かの牧者が想定されているのです。
先ず、神の御言に従ってイスラエルを導いてウルの地から旅立っていった「父祖アブラ

ハム」。彼もまたイスラエルの牧者だった。
でも、恐れがあったり、慄きがあったり、不安があったり、猜疑心があったりして、すんなりと神の御言に従い通せなかった。自分の（実際には義妹でもあった）妻を、妹とだけ紹介して、自分の身の安全を守るようなことをしているわけですから・・。でも、彼はあくまでも民の牧者だった。だから、祝福の基となったわけです。

次の牧者は誰かと言うと、「モーセ」です。
イスラエルをエジプトから導き出して、神の民として整えた。
しかし、アブラハムを超え、モーセを超えられていたイエス・キリストは、“大牧者”なんかじゃないんです、“超牧者”です。他の誰もが遠く及ばない、そういう牧者であられた。モーセのみならず、旧約に現れたすべての牧者を超えて、唯一完全なる牧者であられた。

この手紙を読まれてきてお分かりだと思いますが、ここでは『贖いの問題』を徹底的に問題にするのですが、一方、『復活の問題』は殆ど出て来ません。復活を意味する「（神の）右に上げられて」という言葉が一回だけ出て来ますが、それ以外にはありません。

言い換えると、この手紙の著者は、「私たちの魂の牧者であり、命の牧者であるイエス、その御方の御許に在る時、その御方に従い続ける時こそ、本当の平和は訪れるのだ、そこにしか平和はないのだ」と、そのことを一所懸命に伝えているのです。「イエスを離れたところで、どんなに頑張ってみても、慈善を行ってみても、社会福祉をしても、それは本当の意味での（恒久的な）救い、喜び、平和をもたらすことにはならないのです」と。

私は毎年二回、相模原にあります「和泉福祉専門学校」という学校の礼拝で、お話を頼まれます。その二回のうち一回は、入学直後の一年生の礼拝でのお話で、もう一回は卒業の間際の二年生に向けてのお話です。
私が最初にした一年生へのお話は「あなたがたは福祉の専門家になろうとして、この学校に入って来たんだろうけれども、福祉というものは学んでできるようなものではない」というような話をしました。「本当の福祉は、その人と一緒に生きようという願いと祈りがなかったならできっこない。二年間かけて、そういう傲慢が自分にあったなら、それが打ち砕かれるようにして、この学校で勉強してください」と。
それが校長のお気に召したのかどうかは分かりませんが、それから毎年頼まれています。
本当に私たちが弱き方々のために仕えてゆこうと願うならば、生半可な知恵や力は何の役にも立たない。本当に自分自身がそのことをしっかり踏まえた上で、弱さのあるお相手から直接学ばせて頂こうという遜った姿勢を基本的に作れなかったら、社会福祉なんて大それたことはできっこない、と私は考えているのです。
要は、「一緒に生きること、一緒に歩くこと、なのです。そういう風に共に生きられない中では福祉は生まれてこない、イエスの愛を生きることにはならない」ということです。

イエスは罪が全くない御方だったのに、私たちと同じ「罪人の頭」となってくださり、バプテスマのヨハネから洗礼さえもお受けになった。悪魔の試みもお受けになった。そしてそれは「俺様には神力があり、エイヤッというウルトラマンのように格好よく、サタン

に打ち勝ってみせる」という構えではなく、絶えず御父への真摯な御祈りをもって、一つ一つの問題に打ち勝ってゆかれた。肉体の弱さを持った人間であられても、サタンの力には御言で打ち勝てることを、イエスは具体的に証明してくださった。そのために、私たちの一番弱い姿をイエスは共有してくださったのです。

そうした中ではじめて「さあ、あなたがたも共に立ち上がりましょう、神が私たちの味方なのだから、あなたがたには悩みがあっても、神があなたがたを創ってくださったのだから、すべてが神に覚えられていることを信じ、感謝しましょう、喜び合いましょう、励まし合いましょう」と御声をかけてくださる。それが十字架の主に繋がっていく道なのです。
だから十字架への御受難の道は、何も最後の一週間とか、イエスが裁判にかけられた前後の僅かの間ということではないのです。地上に生まれ落ちられ、死に至られるまで、イエスはずっと、十字架への道を歩み続けていらっしゃったのです。
よく子どもたちのクリスマス会でお話をする時に、「世界中で一番惨めな誕生をされたのはイエス様だよ。旅先で、人には誰からも祝福されないで、しかも、お生まれになるのにふさわしい場所がなくて、家畜小屋で生まれられ、ベビーベッドもないから、馬や牛の餌が入っている飼い葉桶の中にお寝かせしたんだよ。イエス様は正に、馬や牛の餌のように扱われたんだ。だから、御自分の命を投げ出すためにこの世においでになったことを、その出来事は表しているんだよ。そういうことがお出来になったから、馬や牛のように扱われてきた奴隷のような人たちを、憐れんで救われたんだよ。」と話します。

「イエスがお生まれになった当時の社会では、漁師であり、農夫であり、大工であるという、そういう仕事に携わっている人々は皆、人間でなく、牛や馬のように見做されていた。そういう人々に「このわたしに、あなた自身を委ねなさい」と仰って、この地上にお生まれになったのが、イエスだったのです。」とも話します。

イエスは、エルサレムという大きな町に住む学識のある学者の家ではなく、家柄のいい祭司の家庭でもなく、貧しい大工のヨセフの家に人となられた、そのイエスは徹頭徹尾、「永遠の契約の血による羊の大牧者」としての道を歩み通されたんですね。
けれども、ここに書いてある「永遠の契約の血による羊の大牧者」という言葉は、考えなしに読んでしまうと、すごく煌びやかな印象を持ってしまうという危険性があるのです。

「永遠の契約の血による羊の大牧者」、優れた偉大なる御方、輝ける勝利の主は、ところが、ちっとも輝いていなかったのです、実は、この時点では・・。　というのは、この言葉は「私たちの主イエスを」と続いていますが、この「私たち」とは、この手紙の中で指摘されている人たちを含めての「私たち」であるのですから。つまり、世俗の中でのたうち回りながら生きている「私たち」、主に赦されても愛されても背いており、主の贖いを真直ぐに受け取り生きられないで、もたもたしている、そういう「私たち」なのです。

では、その「私たち」の主としてイエスは、今尚忍耐をもって贖い続けてくださっているのか、御自分の血潮を流し続けてくださっているのか、その御方は、そこに留まり続けて

おられるのか。いや、そうではないことがこの手紙の中に、初めてはっきり出て来るのです。

イエスは「死者の中から引き上げられた平和の神」と書かれています。現実世界の中で、のたうち回っているような「私たち」と共におられるだけでは、イエスと雖も「私たち」に平和をもたらせるわけにはいきませんでしょう。ですがイエスは、「滅びの中から、死の中から甦ることが許された御方、その後、天にまで引き上げられた御方、神との関係がその中にあっても堅くきちんと保たれ続けていた御方、神の御意思に従い続けることによって神の高さにまで高められた御方」それが、平和の主、イエスなのです。

平和というのは、この世の中をうまく渡って行く、ということとは全く違うのです。
イエスは、神が描かれた青写真通りに救いの御業を完成し、そうして、その神の御業を終えることによって、神と一つであられることを明確になさった御方です。「平和というのは神との一致というところに生まれて来るものなのです」ということを、もう一度私たちに向かって訴えかけておられるのだと言ってよいと思います。

第㉑節、
御心に適うことを、イエス・キリストによって、わたしたちにしてくださり、

「御心に適うこと」これも難しい言葉ですね。御心に適うこととは「神の御前で善しとされること」そのように言われています。ではでは、神の御前で善しとされるというのは一体どういうことなんでしょう。それは、神がイエスを通して表してくださった御心、御計画を、その通りに、誠実に、生きることです。

イエスの御生涯を読んでいってみると、福音書の記者もそうですし、手紙の著者もそうですが、「イエスがこれをなさって成功した、うまくいった、上出来だった。」とは、どこにも書いてないのです。そういう評価は、どこにもないのです。
御旨によってこれをなさった（この世の評価はどうでもいいのです）。神がお考えになったことをやった（それでいいのです）。ここでは、神の御前で善しとされるとは、「私たちをお創りになった意図を神に願い求め、間違いなくその通りに生きること」なのです。

神は私たちを何のためにお創りになったのか、そのお答えは、創世記に出ています。
「神がお立てになった秩序を保たせるために、創られたすべてのものが価値と意味をもって、喜びの内に生き続けられるように手助けするため、そのことのために、神はアダムを創られた」と。

現実の中で生活している私たち、現実の知識や文化や、あるいは富や豊かさの中で育っている私たちにとっては、完全に神の御心に従って生き切ることは、現実問題として不可能なのです。しかし、神は大変素晴らしい御方ですから、その私たちにそのサンプルを見せてくださいます。アブラハムに「あなたは、生まれ故郷を離れ、父の家を捨てて、これからわたしが示す地に出てゆきなさい」と仰ったのです。

言い換えれば、「あなたがたが生きるために便利だと感じている便利さを全部捨てて、あなたがたが生きるための知恵と思っているものを全部捨てて、全くそうでない生き方を始めなさい」と仰るのです。

その声をアブラムは聴いて、そうしようと決心して出て行ったのです。しかも常識に反して「どこにゆく」なんて聞かないのです。たいてい「ここを出ていけ」と言われたら「どこにゆくんですか?」と聞くはずですよね。でも、アブラムは正に「行きなさい」と言われたら、「ハイ」と言ったけれど、どこに行くのか、彼にはさっぱり分かっていなかった。さっぱり分かっていないからこそ、彼は毎日神に「今日はどっちに行くんですか、この次にはどっちに足を踏み出すんですか？」と聴き続けて生きなければならなかった。

「神に問い質しながら、聴き返しながら、自分の歩みを方向づけてゆく」それが善いことなのです。私たちが常識的に考えての善いこととは随分違います。私たちが善いことと言うと「私は何人教会に人を導きました、私はどれだけの証しをしました、私は教会のためにこれだけの奉仕をしています」ということが善いことだと考える。
だが未来に向けて計算ができる、計ることができることは、神の御前では価値がない、誇れることではないのです。

神の御言に従って生きることは、「結果を（自分の思い通りに）想定しない生き方なのです」だから、「神に愛されたから、こんな素晴らしい物が私の手にあります」と、何か物を持った時が一番気を付けなければいけないのです。「本当にそうなのか。それが素晴らしいと言い切った時に、それが無くては、私は惨めだと感じる自分がいないか、もしいるとすれば、それは御心によるものではない。」そういう神の御声をいつでも聴いてゆかなければいけないのです。

私たちは「何かこう、より優れていて、より大きくて、より人から見て愛があって、素晴らしそうで、というようなことが行えれば、神はお喜びになるだろう」と考えますが、そうではありません。「むしろ、私たちが本当には自分には何もできないことが分かって、神様、御力をお貸しください、そして、あなたの御言に従わせてください、と祈りながら、与えられた恵みを存分に用い尽くし、与え尽くして、歩み抜いた時に初めて、神は喜んでくださる」のです。　（そうやって、神の忍耐と憐れみを学ぶのですね。　写者記）

喜ばれない生き方をしないため、そうならないために、どうしたら良いのでしょうか。
イエスを仰ぐのです。ゲッセマネの園でペテロとヤコブに「あなたたちは確かに優れた弟子ではあるけれども、誘惑に陥らないために、目を覚ましていつも祈り続けなさい」と言われました。でも、できないのです。イエスが血の汗を滴らせて祈っておられる姿を見ようとしないで、寝ちゃうのです。言い換えれば、「何とかなる、その御方についてさえ行けば、大丈夫」という変な安心感だけをもってしまって、イエスと一緒にいたのかもしれません。

イエスと一緒にいても、あなたの足元はいつもすくわれるのだ、揺さぶられるのだと言われるんですから、目を覚まして祈り続けることですよね。何かをしでかすことではない、「イエスが祈っていらっしゃる、そのお祈りを共有すること」です。
自分の力ではどうにもならないこの世の大きなサタンの力と、神への反逆に対して、どう対応していったらいいのか、どう対処していったらいいのか、どう関わっていったらいいのか。そのことを神に向かって「祈り求める力を与えられるように願い求める」以外に、勝つ道はないのです。　（今もまさに世界の状況も、日本の状況も、どうしようもないほどサタンの言いなりになっているようです。写者記）

「世に勝つ勝利は、私たちの信仰です」と聖書は言っています。
では「信仰」ってなんなんだ？　こうだと信じているから、こうだと分かっているから、こう考えているから、というのは、それは信仰ではないのです。
「信仰」とは、イエスなしには、何もことが進まないことです。ものが動かないことです。この自分の存在の意味が確認できないことです。

「イエスに、本当にお縋(すが)りして生きてゆく。自分の力では何もできないので、唯、神の大きな御言の御恵みによって新しく造り変えられながら、生きてゆく、新しく神に対応する力を神から作り上げて頂いて、生きてゆく」そういう生き方をする時に「御言を伝える者、祝福を証しする者、恵みを多くの人々に指し示す者としての歩みができるのではないか」そのように思います。

では、ここで㉑節後半を聴きましょう。
「神の御心に適うことをイエス・キリストによってわたしたちにしてくださり」と祈っているのです。

神の御心に適うことを、「私たちがして」ではないのです。「私たちにして」なのです。
「『イエスがしてくださること』によって、神の御心を行うためのすべて善きものを備えてくださるように、神が十分に恵みを備えてくださるように」そのように祈り求めているのです。
この祝福の言葉は、すごく大きな意味をもった言葉なのです。さらっと聞き流せる言葉ではないのです。こんな祈りが出来たなら、自分ひとりの考えでは動けなくなるのです。
「神様、絶えず私を新しく造り変えてください」と祈っていく以外に、この祝福に応えていく道はないのですから。

私はこの祝祷を、月に一度の『聖餐式』がある時だけ行っています。
「そこでは、キリストの血が彼らの中に生きて働き、キリストの肉が彼らの中で咀嚼されていくわけですから、その時こそ、そこにはキリストが共に臨んでいらっしゃる。キリストによって成すことができるだろう」と思いますから、この祝祷をするのです。

「お前の今日はどうだったか」と一日の最後に自分を振り返ってみる時、キリストによって造り変えられた力によって生きた時間は、どの位あったでしょうか？

「すでに造り変えられた、と思いつつ生きる」のでは駄目なのです。もう洗礼を受けたのだから造り変えて頂いた、私は造り変えられたのだと思い込んで、平気でこの世のルールに従って、この世の計算で動いてしまうのは、造り変えられていない証拠です。誰がどう言おうと、どんなことが起ころうと神の基準にピタッと合って生きる、これは難しいことです。
ごく僅かな世界の動きが、確実に私たちの生活をいろいろな格好で揺さぶるんですね。そういう揺さぶりを周り中から受けながら、いや、そんなものは終わりの日が来る時には意味を失うんだと本当に知った人に「終わりの日をひたすら待ち望みながら生きることが現実の生活の中で、出来ますか？」と問われたら、それは難しいですよね。

弱い者と共に生きようとした時に、しわ寄せになって来る、経済的な人員的な、様々ないたずきを自分も受け止めながら、「でも、大丈夫なんだよ」と彼らに確信を持って言えるでしょうか？　この手紙を読んでいながら、私たちは、自分に都合良く「門の中で」生活するのです。「救われている私たちには、何が起ころうと終わりの日には安全で大丈夫なのだから。まあ、それはそれでこっちへ置いといて、今のところはあの人たちのためにどうやったらいいか考えましょう」というような形で考えることは、ある程度できるのです。そういう形の福祉、そういう形の慈善は、私たちの中では出来易いのです。

ところが、現実にそういう締めつけをビシビシ受けながら生きている人間に、「でも、救いは確立しているのですよ、イエスによって顧みられているのですよ」と、そのいたずきを自分も共に受けながら、平安と確信をもって御言に生きて行くということは、すごく難しいことです。

ある大きな会社でコンピューターの仕事に携わっていた障害者の方が会社のリストラの対象となって失業してしまいました。「先生、どうしましょうか」って、近くの職業訓練校に通っていた間だけ、教会に見えていたその兄弟から、早速電話がかかって来たのです。福祉事務所に出かけていったりして、やっと彼の住まいは確保できたのですが、本当に路頭に迷うわけです。でもそういう方に対する配慮は、安定した会社のためならするけれど、会社が危なくなったら関わっちゃいられない、という現実が私たちの周りに起こります。
「そういう方のために何ができるか？」　本当に力が弱くて何もできない。彼がどうしようかとあせっている時に「一緒に祈ろう」といって祈ったのです。「神はあなたのことをあなた以上に良く知っている、だからその御方にお願いし、その御方に助けて頂く以外に、今どうこうできる道はないだろうから、先ず、それを信じて祈ろうよ」と呼びかけ、祈りました。そして事を始めて行ったのですが、未だ仕事は見つからないのです。今月から何とか失業保険が貰えているのですけれども、失業保険が切れるまでに何とかしなければいけないので大変なのです。

でも、神は、そんな駄目な弱い人と世の中で言われている人でも、見捨てられるような御方ではないはずです。彼のためにちゃんと神は道を用意されているはずなのです。ただ、

自分の知恵や自分の思いで道を探しているから見つからないだけで、アブラハムのように「ハイ」と言って出かけて行けば、案外道があるかもしれない、と言ったのです。

神は、それらのことをすべてご存じです、そこまで信じ切れるかどうかは、私たちの信仰の問題になる。この世の一般的な知恵ではどうにもならない現実が、今確かに周りにはいっぱい起こって来ています。でも、私たちの神は「平和の神です」。あたふたさせる神ではない、恐れさせる神ではないのです。何が起ころうと一人一人をきちんと担ってくださる御方なのです。だからその御方にしっかりと結びついて歩んでゆきさえすれば、日に日に新たに造り変えられた者として神の御前に立てるのではないか、と思うのです。

「そういう神の御力が働いてくださることによって、日々の生活を平安のうちに送れるのだ」ということを信じて祈る「祝禱」が、正に第⑳、㉑節の祈りなのだろうと思うのです。それは、わたしたちを創られた者の初穂となさるためです。神は、私たちをすべての創造物の初穂として、御自分のものとして受け入れてくださる、御自分のものとしてくださる、そのために神が私たち一人一人を新しく造り変えてくださるのです。その大きな御約束をここできちんと与えてくださるのです。

第㉑節後半
すべての良いものをあなたがたに備えてくださるように。
栄光が世々限りなくキリストにありますように、アーメン。

「キリスト・イエスに御栄えがあるということが、平安であることなのだ」という祝祷がここで終わるわけです。
今までの復習というような意味も兼ねて、「以上のような勧めの言葉」と書かれている、「勧めの言葉」というのは一体どんな言葉なのか、大きく分けると三つあるのですが、その三つを来月までに見つけて来ていただきたいのです。そうすれば一緒に学んだ「後半のまとめ」にも大変役立つのではないかと思います。　　(1998年8月15日)

写者あとがき

2節という短い聖句をこれほどまでに説き明かしてくださるのが松山幸生先生です。
説教でも研究会でも1節を大切に丁寧に神の言葉に接してこられた先生の姿勢を思い浮かべます。懐かしいです。なぜか涙が出てきます。この涙は何だろうかと思います。
研究会では「優しいお姿」、講壇では「厳粛なお姿」で、大きなお声にて讃美歌をリードしてもくださいました。私の生ぬるい生き方に、一本の筋金を通してくださったのも先生です。
その跡を少しでも歩めたらと願ってここまで来ることができました。

神様はその歩みを確かなものにするために、私に恵みを増し加えて、森容子先生を伴奏者に選んでくださいました。聖霊のお導きなしには考えられないことです。
今回も森容子先生に、関連する説教をお願いしました。時にアドベントの只中にあります。ご高配に重ねて感謝いたします。予定では1月の掲載ですが、12月とさせて頂きます。

2023年から2024年にかけて、私たちはまさに平和という問題を深く考えなくてはならない時にあります。その時に松山先生は「平和」を考え直しなさいと言われる。「あなたがたの交わりが神の支配のうちにありますか」と問われる。戦争や政治の汚濁の著しい中にある私たちに「＜にもかかわらず＞キリストがこの私を赦してくださったのだから、自分も相手をできる限り寛大に受け入れ、お互いの良き関係性を主の前に形成してゆきましょう。」「神の平和を生き抜きましょう。」と諭してくださっています。

この学びの第4回で「アイデンティフィケーション」という言葉を使われました。私は松山幸生先生のモチーフの一つになっている言葉だと思っているのですが、ここでは「門の外に出る」という言葉でそれを語っておられるように感じています。旧約聖書の時代から延々と引き継がれる「神の平和」。困難な時代だからこそ、困難であっても祈らなくてはならないと学びます。
「あなたがたの平和は、この永遠の契約の血によって、しかも唯一回限りの完全な契約の血によって、保証されている平和、イエス・キリストの十字架なしには成り立たない平和を、あなたがたは今担っているのです。」と、ヘブライ人への手紙は厳しいです。
「あなたがた」と言われる「私たち」、少数者たるを受け入れなければならない「私たち」、声を張り上げてクリスマスの讃美歌を歌うことが、愛しみであり、哀しみである「私たち」・・。つい、「聞け、イスラエルよ！」と叫びたくなる「私たち」です。
この著者は「私たちの魂の牧者であり、命の牧者であるイエス、その御方の御許に在る時、その御方に従い続けるときこそ、本当の平和は訪れるのだ。そこにしか平和はないのだ」と命懸けで伝えている、と松山幸生先生は仰っています。
この手紙には「贖いの問題」を徹底してヘブライ人へ説いており、「復活の問題」は殆ど出てこない。ただ一回だけ「（神の）右に上げられて」という言葉が出てくることを学びました。
手紙の著者は「復活の問題」も語りたかったでしょうが、ともかく、何にもまして「贖いの問題」そして「神の平和」をヘブライ人へ伝えたかったのでしょう。そして、今を生きる「私たち」にも同じように呼びかけられておられるように感じます。（写者記）

次ページから森容子先生の説教です。

「救い主イエス・キリストの御降臨」

ルカ福音書　２章：⑧節－㉑節

日本基督教団峡南教会　牧師　森　容子

皆さん、クリスマスというと何を連想なさいますか？　　サンタさん、プレゼント、ツリー、リース、ろうそく、イルミネーション、パーティ、ケーキ、フライドチキン・・七面鳥の丸焼きなんて言われるお方もあるかもしれません。これらは其々、慈悲、施し、祈り、神秘、喜び、感謝、犠牲、赦しなど、クリスマスに因んだ深い意味や由来がございます。

また、クリスマスという言葉は、ギリシャ語の**「救い主；クリストゥス」**（神に選ばれて聖なる油を注がれた者との意味もあります）と、**「礼拝；マス」**とが結びついた言葉です。つまり、クリスマスという記念日は、神の御子、私たちの救い主イエス・キリストの御降誕を喜び、感謝し、心から礼拝をお捧げするという日であるのです。

さて、御子イエス様がベツレヘム（パンの町）でお生まれになったとき、御誕生祝いの礼拝者として天使たちに最初に招待されたのは、羊飼いたちでした。ですが、羊飼いは羊飼いでも、彼らは「特別な羊飼い」であったろうと思われます。

と申しますのは、ユダヤ教の神殿では毎朝毎夕、罪から清めて頂き、神様との和解を結ぶための犠牲が、敬虔なユダヤ人たちによって捧げられるのですが、その犠牲動物の羊などは無傷であることが必定で、祭司たちが傷の有無をよく吟味した後、定めに従って屠り焼却し、香ばしい匂いと煙が宥(なだ)めの香りとして天の神様の御許に立ち上って行くという儀式が行われて続けていました。そのために、完全に無傷の羊が常に速やかに調達できることが必要で、神殿関係者はベツレヘム近郊に自分たちの羊の群れを所有し、細心の注意を払って羊を管理をするための羊飼いたちが雇われていたのです。

そうしたベツレヘム近郊の特別な羊飼いでなければ、いくら天使たちによって御子誕生の知らせが天に響き渡り、主の栄光があたり一面を照らしても、大切な羊たちを置き去りにしたまま、**「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」**などということにはなりません。勝手に遥々出かけてゆけば、羊飼いを首になるか、それよりも、もっと厳しい処罰を受けることとなってしまうでしょう。

皆さん、神様への犠牲の献げ物となる羊の世話をしていた羊飼いたちが、**「世の罪を取り除く神の小羊」**であられる主イエス・キリストの御誕生の最初の礼拝者に選ばれたことには、「神様の深い御心と美しい調和」があられるとは思われませんか？　私はこういうことに感動を憶え、心が震えてくるのです。その感動の裏には、更に深い意味もあります。

それは、いかに特別と雖も「羊飼い」なる人々は、ユダヤの全市民から「地の民」として蔑(さげす)まれている存在だということです。なぜなら羊飼いは、ユダヤ人が最も重視している

律法を守ることができなかったからです。彼らは、羊の群れを絶えず見張り養わなくてはなりませんから、第一に、安息日に仕事を休んで礼拝するというユダヤ人の最重要の規定が守れません。また、日に何度も行う祈祷の習慣や、食事中に度々手を洗うという特別な清めの儀式など、多くの律法の細則も、仕事上、守ることが適いませんでした。ですから、羊飼いたちは、ユダヤ人たちの信仰や食の必要に応えるためにかけがえのない仕事をしていたにも拘らず、罪の清めを行い得ず、穢(けが)れ続けている者として民に蔑視されていたのです。

それは、神の御子なるイエス様も、ある意味、ご同様です。庶民生活者、それも底辺の生活者の只中にお生まれになった神様でした。そのことは、⑫節にある羊飼いへの天使の言葉「**あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。**」に表わされています。御子を探す羊飼いたちだけでなく、私たちも、その「**しるし**」の意味を知らなくてはなりません。

１章に記されているように聖霊によって身ごもった母マリアから生まれたイエス様は、「**布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子**」でした。「**布にくるまって**」と言うと、生まれたての赤ちゃんを産湯につかわせ、新しい産着を着せ、さっぱりとした体を赤ちゃん用の柔らかなおくるみで包んであげるという、ほっこりしたシーンを連想しがちですが、イエス様の場合は、そうではありませんでした。

恐らく、そこには産湯も産着もなく、へその緒を切っただけの状態で、イエス様は布にくるまれていたのです。その布というのも、産着の代わりの四角い布で、四隅の一方の端に細長いさらしか太い包帯のような長い布が、斜めに縫い付けてあるだけのものでした。赤ちゃんのイエス様は、まず、大きな四角の布にくるまれ、それから、その細長い布でお体をぐるぐる巻きにされたのです。

そのことは、取りも直さず、マリアさんの出産介添え人が誰もなく、ひとりで産んで、唯ひとりで産後の処置もしたことを表していると知った時、三人の子を持つ私も驚愕しました。ユダヤ社会では、夫が出産に立ち会うことが堅く禁じられ、しかもマリアさんはティーンエイジャー、恐らく中学生位で、そんな女の子がたったひとりで初産！これは本当にものすごい出来事です。

また、生まれた直後に「**飼い葉桶の中に寝かされている**」という赤ちゃんも、めったにいないどころか、どこにもいないでしょう。でも、風紀の乱れに乱れた当時の宿屋よりも、家畜小屋の方がまだましで、イエス様の御降誕には、まだしも相応しかったのです。

そして、この２つの特別なこと、つまり「**布にくるまって**」ということと、「**飼い葉桶の中に寝ている**」ということは、羊飼いたちが、ベツレヘムにてお生まれになった神の御子を探し出すための重大な「しるし」であったのですが、また、このことは、天から降られた神の御子の御誕生に際し、この世の闇がどれほど深く、漆黒に包まれていたのか、ということを如実に表わしているのです。

ユダヤでは、赤ちゃんが生まれると、その地方の楽師たちを呼んで、簡単な曲（例えばHappy birthday to youのような曲）を奏でてもらい、皆でお祝いの挨拶を賑やかに交わすのが習慣でありました。ですが、旅の途上のベツレヘム、しかも貧しい家畜小屋で生まれられたイエス様に、そのようなお祝いの催しなどあろうはずがありません。

しかしながら、そこは神の御子、イエス様が天上から降られて御誕生されたクリスマスなのですから、陰い話ばかりではありません。その夜のことは、⑬－⑭節にこう書かれています。「**すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。『いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。』**」と。

天の大軍楽隊が、壮大なスケールのファンファーレをもって、御子の御誕生を高らかに賛美したのですね。「**地には平和**」とは、国同士の戦争や人間同士のいさかいなどが無い状態のことではありません。神様の全き御支配による神聖な世界のことで、心の中にそんな世界を有する「（神の）**御心に適う人**」のことを、天使たちが誉め讃えているのです。いったいそれは、どなたのことを指しているのでしょうか？

その夜、その神様に選ばれて、天使たちの大賛美をお聞きする栄誉に与ったのは、荒野に野宿をしながら夜通し羊の群れの番をしていた「羊飼いたち」でした。つまり、その「**御心に適う人**」とは、御子への礼拝を捧げるのに、いの一番に選ばれた「地の民」と蔑まれてはいたが、ここで敗者復活を果たした「羊飼いたち」なのでしょうか？
いいえ、そうではありません。この後、聖書の幾つかの大事な場面において天の神様より「**これは、わたしの御心に適う者**」との宣言を頂くのは、「御父と御心をひとつにされる」御子イエス・キリスト、その御方、唯おひとりです。

そして、その羊飼いたちが御子イエス様を探し当て、礼拝を捧げた後の聖書箇所には、目を留めるべき記事があります。⑰－⑳節です。

その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。聞いた者は皆、羊飼いたちの話を不思議に思った。しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

ここに、天使たちの「**ご降誕の賛美**」に対する反応の3つのタイプが描かれています。第一のタイプは、羊飼いたちです。彼らは、「**幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせ**」、また「**神をあがめ、賛美しながら帰って行った。**」とあります。
第二のタイプは、その羊飼いたちから、幼子について天使が話してくれたことを聞いた人々です。「**聞いた者は皆、羊飼いたちの話を不思議に思った。**」とあります。
第三のタイプは、母マリアです。彼女は、「**これらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。**」とあります。
皆さんならば、どのタイプに当てはまりますか？

第一のタイプは一見、非常に理想的な信仰者のタイプです。目で見、耳で聴いた神様か

らのしるしを、すぐに世の人々に証したり伝えたり、そして、直ちに神の御子を探し当てて、崇め、讃美するという礼拝を行う人たちです。しかし、一旦帰ってゆけば、行ったきり、もう二度と現れてきません。無論、聖書には「羊飼い」と言う言葉はその後幾度も出て来ますが、誕生されたイエス様を礼拝した羊飼いは、この時限りの礼拝者、証し人、伝道者です。つまり、信仰の根が浅いので、そのとき一気に燃え上っても、心の火種が尽きてしまうと信仰から遠ざかってしまうという、非常に残念な「花火型タイプ」と言えます。

第二のタイプは「入り口躊躇型」です。何よりも、この世の慣習や常識を重んじているので、イエス様を神の御子としては、なかなか認めることができません。素晴しい「しるし」や証しを目や耳にしても「不思議なことだなあ・・」で終わってしまい、信仰の入り口まで来て引き返してしまう。もう一歩勇気を出して中へ入ることができたなら、きっと生けるイエス様と御対面し、真実を知ることができたでしょうに、という残念な人々です。

第三のタイプの母マリアは、羊飼いたちのように、すぐに礼拝、証し、伝道を行う行動派タイプではありません。ですが、第二のタイプのように首を傾げるだけの懐疑派でもなく、深く思い巡らす「沈思黙考型」です。そして、すべての事柄を総括的に捉えることのできる知恵と決断力、そして勇気のある人です。この第三のタイプの人が、よくよく熟考の末に、信仰の確信を掴みますと、これほど力強い信仰者はありません。継続的で熱心な礼拝者、証し者、伝道者として主と教会に喜んで仕える人となってゆくに相違ありません。

因みに、母マリアの「**思い巡らし**」という態度は、ルカ福音書の中の重要なシーンに幾度か現われますが、特に天使ガブリエルから、身に覚えのない受胎告知「**おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。**」と告げられたマリアは、いきなり否定はせずに、この挨拶に戸惑い、いったいこれは何のことかと「**考え込んだ**」とあります。

この赤ちゃんについて「**その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。**」、「**聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。**」と言われたことも深く熟考したマリアが、意を決し「**わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。**」とまさに命がけで、天使に受胎を受け入れる返事をなしたからこそ、天の神様の御心通り、神の御子の御降誕が成就したのです。

そして㉑節に「**八日たって割礼の日を迎えたとき、幼子はイエスと名付けられた。これは、胎内に宿る前に天使から示された名である。**」とあります。この命名は、天使ガブリエルから「**マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。**」と告げられたことをすべて受け入れたという証しです。

その時のマリアの心情、その信仰を謳ったマリアの賛歌（マニフィカート）１：47－

53をお読みしましょう。**「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。身分の低い、この主のはしためにも、目を留めてくださったからです。今から後、いつの世の人も、わたしを幸いな者と言うでしょう、力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。その御名は尊く、その憐れみは代々に限りなく、主を畏れる者に及びます。主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます。」**　うら若き乙女であるマリアの素晴らしい信仰が輝いています。

しかしながら、ユダヤの民が、いにしえから待ち焦がれていた「救い主メシア」というのは、イスラエルの国を再建し、政治経済に繁栄をもたらし強健な国をリードする人物でありました。このマニフィカートにあるような**「思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます」**というような人物では、ありませんでした。

ユダヤの民は、人の心に巣食う強欲、貪り、無慈悲、神の御心に背く深い罪を鋭く指摘して、救いと悔い改めに導く人物、そんな者の声は聞きたくもありませんでした。ましてや、神の御子と自称するような不届き者は、不快であり邪魔者であり、彼らの信仰の冒瀆者でもあるのです。それは、世間を騒乱させる者で、十字架に架けて抹殺すべき罪人であるのです。

御子イエス様は、そんなこの世の現実の只中に、神の現実をまとわれて降臨されました。人類が拭いきれぬ神様に対する罪責のすべてをその身に負われ、人々を贖う十字架に架かられるため・・。これこそが、御降誕を記念し礼拝する御子イエス様のはかりしれない御慈愛と真実です。このとてつもない「赦しの愛」のギフトをもたらされるイエス様に感謝し、喜びの讃美を捧げ、神の御子がこの地に御降誕されたクリスマスを、さあ、共にお祝い致しましょう。

写者から
30回に関連してお願いました。時がアドベントでございますので、2023年12月号にさせて頂きました。又森容子先生の説教は拙稿ベストピアの12月号にも掲載させて頂きました。森先生重ねて御礼申しあげます。

一人でも多くの方がクリスマスの本当の意味を知ってお祝いしてくださることを祈りながら。